【短信・ＯＢＯＧ】

温室

戸塚　拓也

平成十八年に卒業した戸塚拓也と申します。以降は、以前私が務めていたある中学校で出会った先輩先生の話になります。

その学校では、冬に立春式という式が行われます。いわゆる元服にちなんだもので、二年生一人ひとりが将来の決意や目標などを明らかにすることで、社会の中で生きる自分を思い描くことを目的としています。立春式に向けた学年集会で先輩先生が生徒たちに次のような話をされました。

「わたしには、大切にしている言葉があります。その言葉は、わたしが小学校卒業時に担任の先生からもらった言葉です。わたしがいたクラスでは、卒業式後の最後の学活で、担任の先生がクラス一人ひとりに色紙に書いた言葉を贈ってくれました。わたしは自分の出席番号が後ろの方だったので、一人目から順に前に呼ばれて色紙をもらって戻っていく友だちの顔を見ていました。ある友だちは『輝』だったり、ある友だちは『笑顔』だったり。皆、その言葉をもらった喜びと感謝に満ちあふれた顔をしていました。そして、いよいよわたしの番となりました。わたしがもらった言葉は、『温室』でした。そして、その言葉をもらうとき、先生に『自分をもっと磨きなさい』と言われました。卒業式、最後の学活、そんな時になぜ？という思いがわき上がり、とても悲しかったのを覚えています。でもね、それ以来、不思議と『温室』という言葉を励みに生きてきた自分がいるのです。」

そう言って、その先輩先生は、もらってから三十年近く経っているであろう「温室」という色紙を生徒たちに見せてくれたのでした。穏やかで柔らかさに満ちあふれた先輩先生がそのような話をされたことに驚くと共に、わたしの心に「温室」という言葉が深く心に残ったのを覚えています。

早いもので学部を卒業して十数年が経ちました。この十数年という時がわたしを教師として一人前にさせるに十分であったかというと、決してそんなことはありません。四つ足歩行がようやくできるようになった程度の未熟なわたしです。「教師になりたい」と思っているのかいないのか自分でも分からなかった学生時代。あの時のわ

たしと今のわたしは異なります。真の教師となりたい、そう強く思う自分がいます。長いようで短いであろう退職までの限られた時間。「今」を大切に、頑張っていきたいと思います。

（とづか　たくや　信州大学教育学部附属長野中学校）